

こんにちは！室長の工藤です。

合浦公園のなかには多くの石碑があるのは、みなさんご存知のことと思います。

今回は、これらの石碑のうち、水原衛作が公園を築造した頃に建てられた碑を中心に、草創期の合浦公園について考えてみようと思います。



故水原衛作君紀念之碑

『新青森市史』通史編第3巻近代（以下、「近代」と略記）によれば、そもそも公園の正門は現在の公園南側ではなく、園内を東西に横断する旧奥州街道にある現在の西門側にあったといえます。そして、その当時の公園を西側の正門から描いたもの（青森県立郷土館蔵「造道公園地之図」、以下「絵図」と略記）が併せて掲載されています。「近代」では、この「絵図」の年代を水原の没年である明治18年（1885）頃としています。私はあと数年下るのではないかと見立てています。



合浦公園西門

さて、「絵図」をよくみると、旧奥州街道の南側に3つの石碑、そして北側に1つの石灯笼が描かれていることに気がつきます。すなわち、①「司馬龍橋句碑」、②「不二亭祇山句碑」、③「山田秀典君碑」、④「灯笼銘」の4つです。このうち、②は本来別の場所にあり、明治21年以降に園内に移された碑です。そして、詳細は省略しますが、①②は水原が合浦公園開設にあたって尽力した人を顕彰する石碑で、④は経済界の有力者として知られる渡辺佐助が、水原の公園開設事業に際して寄付した「美石五重野景夜灯」です（個人蔵資料「公園草創」）。



①司馬龍橋句碑



③山田秀典君碑



④灯笼銘

しかも、これらの①③④の3つが建てられたのはいずれも明治16年です。きっかけは、前年に県令山田秀典が亡くなったことにあるのかもしれませんが。「近代」によれば、水原がこの地を選んだのは、やはり旧奥州街道沿いにある「三誉の松」の周辺に公園を造ることで、当時枯死が心配されていた松の保存の道が開かれるというのが主な理由だったといえます。その意味では、「三誉の松」と旧奥州街道は、水原が造った公園の象徴的な場所だったのでしょう。

また、「絵図」には、旧奥州街道を歩く人が描かれています。水原は、この公園を訪れる人々に、公園で憩い英気を養ってもらうとともに、公園開設のために尽力してくれた人々をいつまでも記憶に留めてもらえるよう、意図的にこれらの石碑と石灯笼を配置したのではないのでしょうか。そして、そこには後に水原衛作の顕彰碑、さらには公園創設の功労者である木村荘助の碑が建てられました。

そうです、合浦公園の旧奥州街道沿いには、公園の草創期の歴史が刻まれているのです。公園を散歩の時にでも、これらの石碑をながめ、そしてそっと触れてみてはいかがでしょうか。